

史跡大安寺旧境内の調査 第149次

調査地 奈良市東九条町 1295-1 他
調査目的 史跡大安寺旧境内範囲確認調査
調査期間 令和元年7月22日から現在調査中

I. はじめに

奈良市では、昭和55年度から史跡大安寺旧境内の発掘調査を実施しています。大安寺は、東西両塔が南大門の南に位置する塔院という区画の中にそびえ立つ「大安寺式」という^{かんいしち}伽藍配置ですが、南大門と塔院の間には、本来、平城京の主要東西道路である六条大路が存在していたと考えられます。

平成28年度からは塔院の北辺及び南大門の南側を通る六条大路の確認を目的として、発掘調査を実施しており、今年度で4回目の調査となります。これまでの調査で、塔院の北門及び六条大路南側溝を検出することができました。平成29年度の調査（第143次）では、南側溝との位置関係から六条大路北側溝と考えられる東西溝を検出しましたが、遺物が出土しなかったため、遺構の時期を特定することができませんでした。

今年度は、北側溝を追跡することを主目的として、3カ所に発掘区を設けて実施しました。

2. 調査の概要

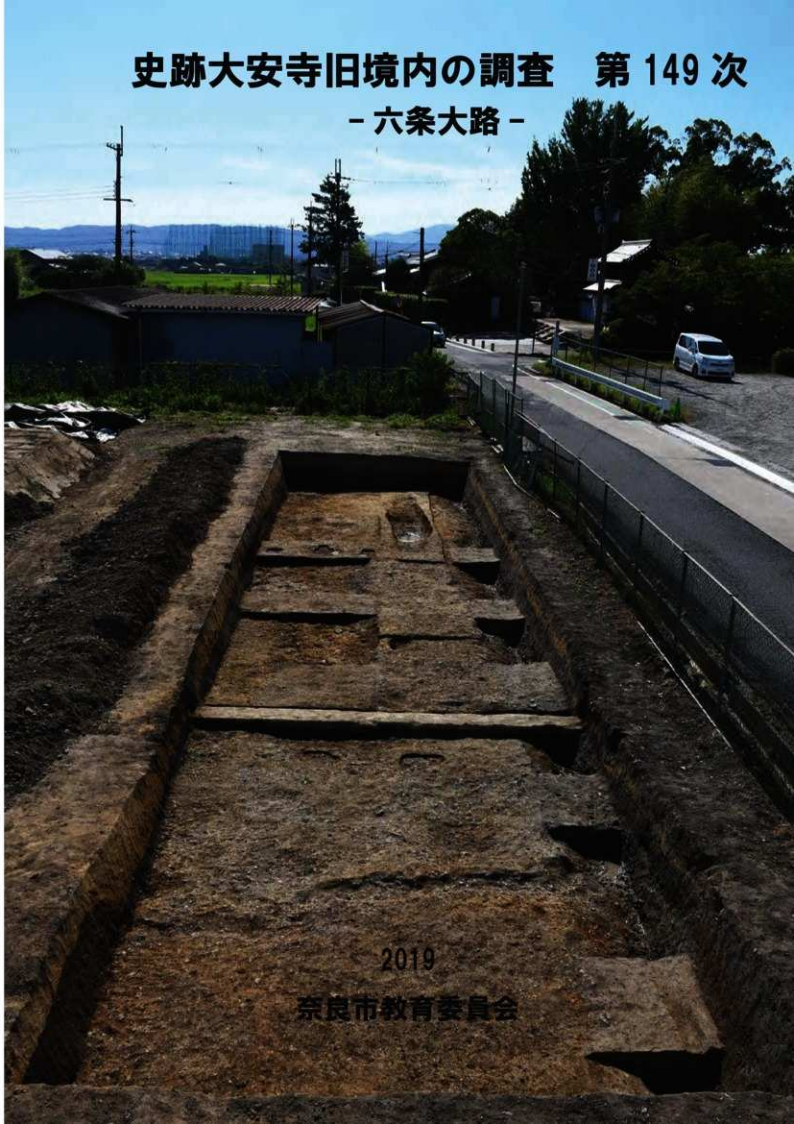
- 【1区】 大安寺南大門に取りつく東西方向の築地塼推定位置にあたる箇所（芝池の南側）に、東西5m、南北5m(25㎡)の発掘区を設定して調査を実施しましたが、奈良時代の遺構を検出することはできませんでした。また、出土遺物も瓦・土器の小破片が数点出土しただけです。
- 【2区】 平成29年度に実施した第143次発掘区の東側に、東西20m、南北5mの発掘区（面積100㎡）を設定し、当時検出された六条大路北側溝と考えられる東西溝の続きを検出することを目的に実施しました。今回の調査では、その東西溝の続きを約6m分確認しましたが、途中で途切れてしまい東へは続いていませんでした。東西溝の幅は、1.0～1.5m。検出面からの深さは約0.3mで、溝内埋土から奈良から平安時代の丸瓦・平瓦や奈良時代末頃の土器が遺物整理箱で3箱分が出土しました。
- 【3区】 昭和52・53(1977・1978)年度に、奈良県教育委員会が大安寺倉廩院から六条大路推定地にかけて発掘調査を実施しており、その際に東西方向の溝が検出されています。この東西溝が六条大路に関わる遺構か否かを検討するために、当時の発掘区と一部重複するような形で東西10m、南北20mの逆L字形の発掘区（面積125㎡）を設定し、調査を実施しました。調査の結果、奈良県教育委員会が当時検出した東西溝の続きを確認することができましたが、これまでの六条大路に係る調査成果からみて、推定される六条大路の路面上に位置することや、奈良県教育委員会の発掘区内で南側に大きく振れること等から、六条大路に関わる可能性は低いことを追認しました。

3. まとめ

六条大路関連の遺構を確認するために、4年間にわたって調査を実施してきました。その結果、六条大路と南・北側溝の一部を確認することができ、六条大路の幅は南・北両側溝心々間距離で約15.0mであることがわかりました。ただ、六条大路北側溝については残存状態が悪く、途中で途切れる状態となっていました。本来は東四坊大路まで続いていたと思われます。

史跡大安寺旧境内の調査 第149次

- 六条大路 -



2019

奈良市教育委員会





図1 大安寺伽藍復原図と六条大路に関する既往の調査位置図

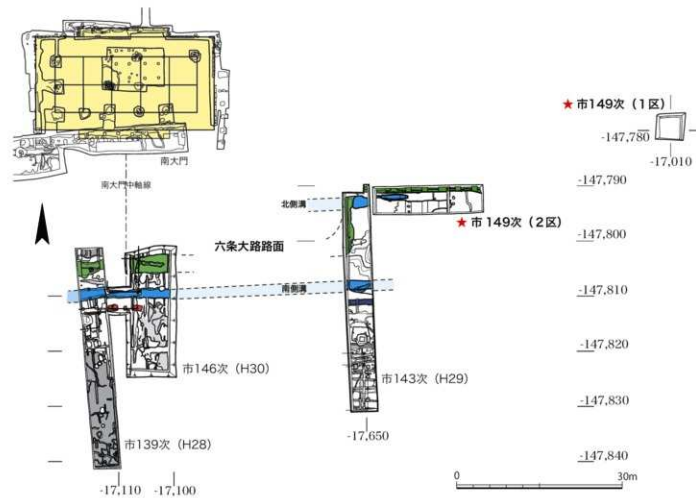


図2 検出遺構平面図

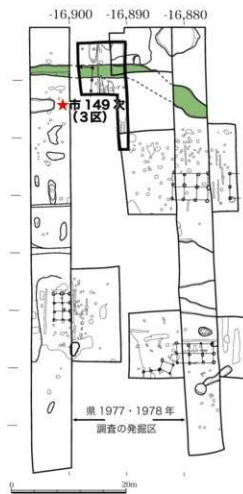


図3 3区検出遺構平面図



発掘区(1区)全景・西から



発掘区(3区)全景・東から